

CUCの教育		随筆		同窓会活動		活躍する卒業生		特集 2	特集 1																	
いよいよ始まる、学部インハウスメディア化と情報発信力教育 — サービス創造学部	共有する思いを — 政策情報学部	商経学部の進化について — 商経学部	チャレンジの夏休み — 教育革新センター	韓国儒教文化 — 礼儀とマナー	金座ストーリー	卒業生のお宿・お店紹介 奥久慈大子温泉郷「旅館 本田屋」	八重山は遺跡の宝島 石垣島中心に50年かけ500ヵ所以上の踏査記録	平岩重信氏叙勲の栄に輝く	同窓生寄稿	ゴルフコンペ開催 — 四の四の会	第25回ゴルフ大会開催 — 瑞穂会	OB会からの報告	同期会からの報告	支部からの報告	支部長会	44期定期総会およびホームカミングデー	同窓会各種委員会開催状況	本部からの報告	同級生の皆さまへ	コラムに学ぶ	後継者の使命感と企業心のはざまの中で…	— 経営計画中間報告	千葉商科大学創立100周年に向けて	世界自然遺産の島に生きる	母校の新しい取り組みを応援しよう	
吉田 優治	宮崎 緑	鈴木 春二	朝比奈 剛	小玉 敏彦	高橋 伸治	加瀬 正裕	河村 弘一	高田 滋夫	大川 邦和	高田 滋夫	高田 邦和	高田 邦和	高田 邦和	高田 邦和	高田 邦和	高田 邦和	高田 邦和	高田 邦和	高田 邦和	勝田 啓示	勝田 啓示	萩原 重陸	内田 茂男	内田 茂男	田代 英人	加瀬 正裕
64	63	62	61	59	57	56	54	54	54	52	51	51	45	36	35	35	35	35	34	34	28	21	5	4		

研究室から	Work-Shop-Board Meetingから ― 大学院 「喫煙マナー指導」の取り組み ― 学生部 同窓会と大学の連携 ― 大学改革の重要戦略として ― 地域連携・ネットワークセンター サマープログラムはグローバル化の第一歩 ― 国際センター 研究の原点	武見 浩充 松尾 正敏 瀧上 信光 高橋 百合子 吉田 優治	65 66 67 68 69
ゼミ紹介	「藤江ゼミ①・②」	藤江 俊彦	70
CUCレポート	<ul style="list-style-type: none"> ■ ニュース・イベント 人間社会学部、来春開設決定！ 経済産業省より経営革新等支援機関の認定を受ける 「瑞穂会」で学んだ学生が快挙 入学から5年間で修士号取得が可能に ■ 地域連携・ネットワークセンターニュース 「チャレンジ応援奨学金」第1号奨学生誕生 春学期「チャレンジ応援奨学金」受賞の喜び・抱負 本学における学生のボランティア活動 ■ ボランティア型宅配・サービスについて 一度は参加してみたいCUCボランティア型宅配・サービス 内面の成長が見られるCUC宅配・サービス ■ 活躍する学生の声 被災地ボランティアを通して伝えたいこと 	三木 絵里子 陸 正 繁野 春樹 豊田 優也	73 74 75 77
保護者便り	ガンバレ！ 学生自主防災会 教育後援会役員会報告 交流で親睦の輪を広げましょう！ 「夢」を持って社会に羽ばたく若者を輩出する千葉商科大学へ 「千葉商科大学／1394人のOB／OG社長名鑑」!?	佐藤 春男 露木 真弓 宮下 律江 川瀬 功	78 79 82 83
著書紹介	『信用金庫と中小企業のイノベーション』 著者・鈴木孝男	鈴木 孝男	85
▼同窓会支部事務局一覽	86	▼編集後記	88

母校の新しい取り組みを応援しよう

加瀬 正裕

● 千葉商科大学同窓会会長
(昭43 経済)



「あ、上野駅」の歌謡で知られるJR上野駅は、明治16年(1883年)7月に旧・日本鉄道(私鉄・上野く熊谷間)の開業とともに誕生し、以来今年で130周年を迎えました。国民生活と経済活動の両面から欠かせない鉄道事業は、駅業務によってこそ円滑に旅客輸送がなされています。すでに130年の歴史を持つその上野駅。一方で幹線駅の果たす役割・使命等は不易であるとしつつも車両の進化とともに、国民の負託に応えてまいりました。昭和30年代は「金の卵」と称された中学校の卒業生が産業界から有用な労働力として歓迎され、地方から東京を中心とした首都圏へと集団就職が集中しました。その発着駅の象徴が上野駅で、日本の高度成長はこうした状況から始まり国民生活を向上させました。昭和39年(1964年)10月1日に東海道新幹線の開通、同10月10日には東京オリンピックの開幕と続き、見事戦後日本の復興を世界に発信、あれから半世紀。実は日本中が湧い

た高度経済成長期に一気に整備されたものが社会インフラです。東京オリンピックの年に一斉に作られたそれらが今、老朽化による危険が指摘されており、対象は道路・トンネル・橋梁、上下水道、そして学校、病院等多くのものが更新期にあると言われ、特に地震は大きなリスクです。高度経済成長期から少子高齢化社会を迎えた今、新たな課題です。ある試算では、今後50年間で更新に要する費用は330兆円とも言われ、年々の負担額は莫大です。自治体が、そして国が通常の財政執行により設備更新をしていくことは考えにくく、国民負担が当然のこと増えそうです。先々を考えた国民生活の在り方が問われる時代が来るのではないでしょうか。

こうした中、母校、千葉商科大学は高等教育の社会的ニーズに應えるため、平成26年4月に新たな「人間社会学部」を開設予定です。未来永劫、既存3学部と共に応援してください。

世界自然遺産の島に生きる

平成25年7月3日
ユニバーシティ・アワーより

田代 英人

有限会社八重岳 代表取締役
昭和48年3月 商経学部経済学科卒



田代 英人(たしろ ひでと)

昭和43年3月、鹿児島県立屋久島高等学校卒業。昭和48年3月、千葉商科大学商経学部経済学科卒業。三和シャッター工業株式会社、長岡商事株式会社を経て、平成2年に屋久島へ帰る。平成3年、民宿八重岳完成・営業開始。平成12年、ロッジ八重岳山荘完成・営業開始。平成15年、ビジネスイン八重岳完成・営業開始。平成18年、ホテル屋久島山荘およびビジネスイン種子島・営業開始。現在、有限会社八重岳代表取締役。

プロローグ

皆さん、こんにちは。ただ今ご紹介いただきました田代と申します。このたびはこの場にて皆さまにご挨拶できる機会を与えていただいた原田理事長先生はじめ、諸先生方のご配慮に感謝いたします。お酒を飲んで話すのは得意ですが、このような大勢の皆様の前で、しかもこんな壇上でお話するのは生まれて初めてです。おそらくこれで最後だと思います。何をお話しているかお聞き苦しい点をご容赦ください。

私は昭和48年、本校を卒業させていただきました。昨日40年ぶりに本校に登校し、近代的でお洒落な校舎とまるで屋久島の森の中に入ったような緑の多さと、コンピ

二に驚きました。今さらながら本校の卒業生であることに誇りを感じるとともに、もう少し真面目に勉強しなければと後悔の念もあります。

私は鹿児島から南へ120キロの屋久島から参りました。ちよつと質問いたします。もし皆さまの中で屋久島を知らない方がいましたら手を挙げてください。(会場を見た後)5名ぐらいいらっしゃいました。商大生の地理の成績は「優」です。もしこの同じ質問を私の商大在学中の40年前にしたら、ほとんどの学生は知らないと答えていると思います。屋久島の隣に種子島という島があります。当時は、種子島は知っているが、屋久島は知らないという学生がほとんどでした。種子島は歴史の教科書で鉄砲伝来の島ということで必ず勉強します。私は、出身はどこかと聞かれた時、鹿児島県とだけ答え、屋久島出身だということは恥ずかしくて言えませんでした。今では考えられないのですが、島の出身者はそんなコンプレックスを持っていました。私は屋久島を知っているかどうかということ、その人物が博識であるかどうかのバロメーターにした時期もありました。当時の商大生は地理に関しては「不可」でしたが、今の皆さまが「優」を取れるようになったことには大きな訳があります。それは、

屋久島が平成5年に世界自然遺産に登録されたからであろうと思います。もしそういうことがなければ、皆さまも屋久島を知らなかったかもしれません。

千葉商科大学との縁

今、私はこの世界自然遺産の恩恵を受けながら屋久島で生きています。7年前に千葉商大大学院生の堀川さんと学生部長である松尾先生の息子さんがソフトエネルギー(小型水力発電、ソーラー、風力)の調査で屋久島にいらつしゃいました。そして、彼らのゼミの教授が、屋久島にある屋久島電工という水力発電の会社と教授を兼務しておられる谷口先生だと聞きました。私の友人が谷口先生と知り合いで、うちのゼミの学生が屋久島に調査に行くがいい宿を紹介してくれないかということ、たまたま私の宿を紹介しました。その時2人の学生さんとソフトエネルギーについての話をしました。その時私が商大のOBであることも言いました。それから1ヵ月後、千葉商大の内田先生より、「堀川様より話を聞いた。今度、商大80周年の記念行事がある。その席で講演をお願いしたい」との手紙と電話を頂きました。町内会の会合でしか話をしたことがない人間が大学で講演などとてもな



雄大な屋久島の自然

い話です。また私は、そういう話をする能力もない才能もない。何の取り柄もない人間ですとお断りしました。それが7年前です。そして昨年8月、屋久島の町報を見ていたら、屋久島町合併5周年の式典に屋久島親善大使であられる島田晴雄学長が出席されることを知りました。そして、9月にたまたまホテルの予約書を見ていたら島田塾10名様の手配が入っておりました。役場の人に聞いたら、他のメンバーも凄いならしい。私を育ててくれた母校の学長が自分のホテルに泊まる。不安で寝られなくなりました。

しかし、3年前、屋久島山荘に秋篠宮殿下がご宿泊され、その時も寝られない日々が続きました。でも何とか楽しく過ごしていただき、無事送り出すことが出来たことを思い出し、よし、できる限りのおもてなしをしよう。絶対喜んで帰っていただこうと決心しました。そして、ホテル所有の屋形船で夕食をしていたくプランを計画しました。役場の職員から、先生は次の日、縄文杉を目指すからレストランでの食事がいいのではないかという話がありました。私はどうしてもということ船での夕食とさせていただきます。そして、夕食船上で皆さまの自己紹介があり自分に順番が回ってきた時、「私は千

葉商科大学の卒業生です」と言いました。そうしたら、目を丸くした学長が立ち上がり、「田代君、ハグをしよう」と、皆の中でハグをいたしました。こんな屋久島の川の上で卒業生と会ったことが本当に嬉しかったんだと思います。私も人生63年の中で男性とハグをしたのは初めての経験でした。それから座が大いに盛り上がり、今度は理事長に来ていただくという話になりました。まさか自分の卒業した学校の理事長とお会いできるなどとは夢にも思わないことです。

そして今年の4月28日、29日、屋久島に来ていただきました。その時、宮崎先生、内田先生ら5名ほどで船の中で焼酎を飲みながらいろんな話をしました。飲んだ勢いで宮崎先生に、「私を育ててくれた千葉商大に何の恩返しもししていない。これからでも私にできることなら何でも協力します、何でも言ってください」と言ったその一言が私をこの壇上に上がらせることになりました。本当にたまたまの結果です。7年前、1回お断りました。しかし、今回再びこの話が持ち上がり、私はもうこの壇上に上がることは運命であり人の縁があったということ、もう男として断ることはできませんでした。

私は昭和43年、屋久島高校を卒業し上京しました。当

時は屋久島から鹿児島までフェリーで8時間、鹿児島から急行列車で東京まで26時間、合計34時間かかりました。1年目、何校か受験しましたが屋久島で遊んでばかりいて受かることができませんでした。もう1回チャンスにくれと親に頼み浪人生活に入りました。しかしその年の夏、あまり勉強が好きではないので働きたいと思い屋久島に帰りました。そこで父と進路について話し合いました。自分は将来商売をしたい。具体的にこれといった目標はないが商人になりたいと伝えました。商売をするにしてもしないにしても大学だけは出ておいたほうがいいということになり、学生生活を東京で過ごし教育者である父が、自分が学生の時商人の息子が入る学校があった。昔は巢鴨高等商業学校という名前で名門校である。今は千葉商科大学と名前を変えている。そこへ行ったらどうかと教えられ、よし、自分も商人で生きよう、千葉商大へ入ろうと迷うことなく決めました。昭和44年の入学です。そこで提案です。これから少子化が進んでくると入学する学生もどんどん減ってくるのが考えられます。私は商人になろうと商大を選びました。そこで、千葉商科大学の中に商人育成学部という特化した学部があれば面白いと思いました。

私自身の学生生活は商人を目指すという目標はすっかり忘れ、アルバイトに明け暮れ、お金を稼いでは旅行をする。寝袋に泊まりヒッチハイクをしたりして日本中を貧乏旅行して歩きました。もちろん休みの時です。当時は列車の通路をリュックを背負って横歩きをしました。昔のリュックは横に大きくて、列車の通路を歩く時に横歩きするのでカニ族と呼ばれていました。ゼミナールは高瀬ゼミナールでした。社会主義経済論という当時流行の思想ゼミナールで、マルクス経済論に夢を描き、共産主義思想を勉強し、理想郷はあの拉致事件で有名な国でした。その当時、あの国に夢を求めて行かれた人が多かったと聞いています。今は行かなくてよかった、行けなくてよかったと思います。そんな学生生活を過ごしながら旅行に目覚め、少し旅行関係の仕事がしたいという漠然とした思いはこのあたりで芽生えてきたような気がします。

民宿「八重岳」の誕生

卒業後、東京で就職しようか屋久島へ帰ろうか、だいぶ迷ったことを覚えています。将来的に島へ帰ることは決めていました。将来島へ帰るのなら急いで就職する

必要もない。島へ帰ったらもう外国に行くこともできない。しかし、世界をもっと見てみたい。今しかチャンスがない。その時、小田実というベ平連の委員長の書いた『何でも見てやろう』というタイトルの本がベストセラーでした。そして親にそのことを言って、借金して海外へ行かせてくれと言ったところ親は怒って、屋久島に帰ってこなくていいから就職してくれとまで言われました。4年間大学に行かせ、親の責任は終わった。行くのであれば自分で金を作って行けと言われ、意地でも作って行こうとアルバイトでその当時70万円貯めました。時給は180円ぐらいだったと思います。1日働いてもいくらにもならない時です。日本円では大変な金額ですが1ドル確か310円です。当時の相場で海外に行ったら約20万円です。シベリア鉄道でヨーロッパへ渡り、皿洗いをしたりして1年足らず、ヨーロッパ、北アフリカをヒッチハイクして社会勉強をしてきました。当時は日本人が海外に行かない時代です。ロンドンとかパリでは日本人に会うのですが、地方都市に行くと滅多に会いませんでした。言葉もわからない土地で苦労もしました。その苦労が現在の私の知恵となり、辛抱と力の源になっていると思います。

そしてこの旅行中ペンションに泊まったりするうちにペンションをやりたいという夢を見ました。日本に帰って屋久島へ帰ろうと会社勤めをしましたが、サラリーマン生活はどうしても性格に合わず、あまり長続きはしませんでした。そして、ちょうど帰る時、屋久島に帰る時の資金にしようとしていた家があったんですがバブルが崩壊し、逆に2千万円のローンを抱えてしまいました。30代まで東京で生活し、父が亡くなり母が1人屋久島で生活していました。あのどうしようもない島へ帰ろう。

この時は世界遺産という言葉も知りませんでした。人2万、猿2万、鹿2万、総人口6万の島です。50平方キロという広さはちょうど東京都下、町田から東村山、北区、江戸川区の広さで、その中に千メートルを超える山が45あります。ほとんど山ばかりです。

民宿作りをスタートするにあたり1年間準備期間を設け、まず下調べをしました。屋久島の観光客の見込み数、観光客と仕事で来る人とどっちが多いのか、港のそばがいいのか空港の近くがいいのか。その頃、島の中に宿泊施設は、ホテル、国民宿舎、旅館、民宿を入れて50軒ぐらいでした。これからはライバルです。敵情視察で10軒ほど宿泊し、様子を見て歩きました。ある程度泊まり歩い

てわかったことは、びっくりするほど無愛想なことです。これで宿がやっていけるのであれば絶対自分は勝てると確信しました。ある程度、屋久島内のデータがそろったので、それを持って銀行と交渉です。この時商大で勉強した知識、経験が生きたように思います。銀行に「私は屋久島での実績はゼロです。しかし、私は商売をやるために千葉商科大学に入り、商法を勉強し（実際は社会主義経済論）、学校卒業後海外視察（実際は放浪貧乏旅行）に行き、そして1年間屋久島の分析をして、こういう宿を作れば絶対にやっていけるはずです」と、支店長室で1時間交渉しました。見通しのたない観光のお客様は当てにしません。ターゲットは確実に来るのが読める仕事の人です。これが銀行からお金を借りる時に非常に大事なことであって、最初から見通しのたない観光客を当てにしていますと言うと銀行はなかなかお金を貸してくれません。しかし、確実に来るのが読める仕事の人ですという計画書を出すと銀行はお金を貸してくれます。これは大事なことですからしっかり覚えておいてください。最後に「わかりました」という支店長の返事でした。「金額は？」と聞かれ5千万円と答えたなら驚いた顔をしていました。おそらく1千万円か2千万円を考えて



ユニバーシティ・アワーでの講演風景 (画面は「屋久島の森」)

いたと思います。「わかりました」が「あとで返事をします」に変わりました。

その2、3日後、3千万円ならとの返事をもらいましたが、ここで中途半端な宿は作りたくない。やるのなら希望通りのものを作ろう。妥協せずあと2千万円何とかしよう。叔父が社長をやっている金持ちだったので叔父にお願いをして銀行と一緒に行ってもらい、予定通り5千万円借りることになりました。バブルが弾けた時の前の住宅ローン2千万円と併せて7千万円の借金になりました。この時住宅ローンの借金は支店長に隠していました。島の人は、あの民宿は相当借金をして作ったらしい。絶対に潰れるといった噂話が耳に入ってきました。負ける訳にはいきません。最初は客室5ルーム、総定員18名の小さな民宿「八重岳」のスタートです。屋久島が自然遺産に登録される3年前です。この「八重岳」という屋号は、叔母が鹿児島で「八重岳旅館」という屋久島の人相手の宿屋をしていて、偶然にも私のスタートの時にそこを閉めたので、私がお名前を引き継ぎました。「八」という字が入ると末広がり将来良くなる名前らしいです。屋久島に八重岳という山があるのですかと聞かれますが、八重岳という山はありません。八重九重に山が重なって

いるので、屋久島の山を総称して八重岳といいます。県庁の職員とか島へ物を売りに来る人を相手にする民宿にしたいと考えていました。しかし、現実には観光客がほとんど泊まるようになりました。

民宿からロッジへ

私は幼い頃、この島の川や海や近くの里山で育ちました。みんないつたい何を見にくるんだろうと本当に不思議でした。ある日、奈良の神父さんが子どもたちを連れて15名ぐらい宿泊しました。この夕食前に神父さんが立ち上がり、「皆さん、今日こうして無事に怪我もなく下りてこられたのは縄文杉さんのお陰です。縄文杉の立つている方向に礼をしましょう」と全員立ち上がって礼をしました。縄文杉というのは凄いんだなと思いました。この杉は私の高校時代に発見されましたが、島の人にとっては大きな杉は当たり前、少し大きい杉が見つかったらしいというぐらいであまり話題にものぼらなかつたと記憶しています。だから私は見たことはありません。縄文杉は屋久島を語る場合、どうしても欠くことのできない存在です。推定年齢が4千年から7200年、周囲16メートル。人が13人手を繋いでやっと抱きかかえること

ができる太さです。この杉に行くとなると片道11キロ、往復22キロ。昨年、島田学長がこの杉に会いに行きました。今年は黒味岳を登頂されて、今年10月に九州の最高峰である宮之浦岳を目指す予定ということです。皆さん島田学長にファイトのエールを送りましょう。

民宿でお客様と会話をしていくにつれ、縄文杉は良かった、白谷雲水峡は良かった、屋久杉ランドが良かったと教えられました。私は屋久島は何もない島だと考えていました。屋久島の民宿の経営者がお客様からの耳学問で説明するようでは駄目だ。白谷雲水峡は私の家から車で30分のところにあります。白谷雲水峡とは、あの宮崎駿さんが何年前『もののけ姫』という映画で紹介し、いつの間にかものけの森として有名になっています。初めて行った白谷雲水峡は感動の連続でした。私はヨーロッパ、アフリカ、南米30カ国ぐらいは歩いて少しは目が肥えているつもりでした。しかし、これほどの森は見たことがありませんでした。まるで原始の森、恐竜時代の森を見ているようでした。それからあちこちの屋久島の森を歩き、山も登るようになり、趣味はカメラで観光協会の中では山のことなら田代に聞けと言われるほどに歩きました。いつの間にか山歩きに興味を抱き、どうせ

登るんだったらネパールの山を見たいということで、15年ほど前から7、8回行っています。最高峰はエベレスト、ではなく、エベレストが真正面に見えるカマパタールというエベレストベースキャンプ近くの丘です。そこまで登りました。約5500メートルぐらいです。先日、三浦雄一郎さんが80歳でエベレストに登りましたがこれはやはり凄いですね。

母と2人で始めた民宿ですが、母が作る郷土料理は評判が良く、皆さま喜んで食べてくれました。そして、実家の2階も民宿にし、30名まで泊まれるようにしました。それと忘れてならないのが平成元年、高速船が就航しフェリーで8時間かかった鹿児島までの時間も1時間50分で行けるようになりました。これが屋久島の観光を大きく変えたと言っても過言ではありません。1年目はほとんど満室状態が続き、この時期は寝食を忘れて働きましました。眠たいとか疲れたとか言っておられません。人を雇うと人件費を払わなければなりません。なるべく少ない人数でどうやればスピーディにうまく、そしてお客様を満足させて帰すことができるか、本当に試行錯誤の日でした。この時期が後々の自分を作ってくれたような気がします。

世界自然遺産第1号に指定されそうだと、ということでマスコミが動き出しました。私の宿にもカメラを担いだ放送局の人たちがよく出入りするようになりました。平成5年の世界自然遺産登録により観光客も年間10万人から15万人、20万人と増加してきました。先日富士山が世界自然遺産に登録されましたが、文化遺産を守ることよりも経済効果のみが優先されるおかしな状態になっていくような気がします。それで私の生活も落ち着いてきました。そろそろ自宅兼用の山小屋を作ろうと思いましたが、そこに昔、親と一緒に田んぼ作りをした土地を持っていましたので、そこに自宅を作りました。今度は我が家に酒好きなお客様が集まり、毎晩焼酎を飲み、好き勝手に屋久島を語り合いました。そして、この自宅のある山の中に宿泊棟を作ろうと思いい、小さなログハウスを作りました。テストで作ったログハウスがあまりにも反応がいいので本格的に建設にかかるところにしました。このロッジの建設資金を銀行に申し込んだところ、山の中の土地は担保価値がないということで断られました。それから、民宿で出た利益で自分の設計で大工さんと毎年1棟か2棟作りました。私の今までの人生の中で一番

楽しい日々でした。それから5年後、風呂と食堂とを含め13棟のロッジになりました。今このロッジは、ミシュラングリーンガイドの2つ星です。この宿はお客さんの要望を集約して作ったものです。ロッジ「八重岳山荘」となり、民宿「八重岳」を凌ぐ勢いになりました。これが民宿をスタートして約10年が過ぎた頃です。

余談ですが、先週BS/TBSの取材を受けました。『大人の修学旅行』という番組です。今ちようどこで話しているようなことをテレビで話します。たまたまこのディレクターがロッジの下見に来られた時、私は今回のこの講演の原稿を書いている時でした。それで、このロッジはこうして出来上がったんだよと聞かせたところ、ロッジの風景だけ撮る予定でしたがその話もぜひ入りたいということで私が急遽出演することになりました。7月21日午後4時からの放送です。鹿児島弁で「よかにせ」という言葉がありますが、ハンサムだという意味です。おそらく、会場の後の方は私の顔があまりよく見えていないと思います。今度テレビでアップで映りますから、「よかにせ」の度合いを見てください。

余談で、休憩タイム

ここで、屋久島のお墓の話をしたいと思います。屋久島は周りが海で男は漁に行きます。女性は心細さがあるのか何か頼るものがほしい。そこで墓を大事にします。「どうして屋久島のお墓はあんなに綺麗なんですか」と必ず観光で来た人が質問します。私の母は毎朝お墓に行きます。今屋久島ではお墓が社交の場、コミュニティの場として重宝されています。2、3日お墓に来ないとうしたんだらう、病気ではないかと必ず心配した人が覗きに行きます。都会では孤独死という言葉があり、何日も発見されないということがあります。屋久島ではお墓のお陰でその心配はいりません。そして、お墓と同様に家の仏壇もとても大事にします。自分たちが食事をする前に仏壇にお供え物をします。10年くらい前に吉田という集落を舞台に『まんてん』というNHKの朝ドラがありました。その集落のお年寄りが畑に行く前に毎日お供え物をしていくのですが、昼帰ってくると思わずなくなるので、仏様が帰ってきて食べに来てくれるということ、喜んで一生懸命美味しい物を備えました。ある日、家に帰り戸を開けました。その先祖の姿にびっくりしました。何とお猿さんが家族で食事にいらしていたという話です。もう人口より猿が増え続けています。「猿害」とい

う言葉が出てきました。屋久島はボンカンというミカンの日本一の出荷量を誇ります。ボンカンの最高ブランドです。しかし、今は猿が増え続け、農家の人たちの悩みの種です。それでも食べればいいんですが、一口食べて美味しくないと捨ててすぐ次を食べる。美味しくない農園は猿も行かない。美味しい農園かどうかのパロメーターになっています。猿の世界でもグルメ化は進んでいるのかもしれません。

ここに屋久島の魅力

何にも増して屋久島の宿泊業の利点は島であることです。屋久島に来たら必ず1泊か2泊はしなければなりません。つまり、滞在型の観光です。例えば、どここの観光地は年間数百万人の観光客が来ますといっても、それが滞在型か通過型かではお客様の落とす金が大きく違います。その点、屋久島の宿泊業は魅力がいっぱいです。それから、屋久島の魅力は何ですかとよく聞かれます。だいたい縄文杉とか宮之浦岳と言いますが、私は違っています。このたった130キロの島の中に一級品の山、一級品の川、一級品の森、一級品の海、それと観光地の要素である温泉、海、川、滝。ないのは湖だけです。例えば信州

は山があるが海がない。沖縄は綺麗な海はあるが山はないということ。また、植物の多様性、亜熱帯から亜寒帯までの垂直分布。これはどういうことかと、屋久島を三角形の山に例えると、下のほうは沖縄とか台湾の植生がたくさんあるということです。頂上のほうにいくと北海道の植生がある。だから、日本列島を縦にした植生があるということです。そして、これらがすぐ手の届くところにある島です。30分で行けるということです。こんなところは世界中探してもどこにもないと思います。皆さん2泊3日で来て縄文杉に登って屋久島を見たと言いますが、それだけの島ではありません。統計はありませんが、おそらくリピーター率は観光地の中ではトップクラスだと思います。私の宿では十何回来ている人も何人もいます。観光業も見たり遊んだりばかりではなく最終的には人とのつながりになると思います。

ホテル「屋久島山荘」の誕生

経営が順調になってくるとあらゆるところからいい話、悪い話が入ってきます。私の場合、銀行から屋久島第二の集落、安房というところにある屋久島一古いホテルが経営がうまくいっていない。銀行がバックアップするの

でやってもらえないかという話が持ち込まれました。ここで銀行と立場が逆転しました。今まで私のほうから頭を下げていたのに、今度は支店長のほうが頭を下げてきました。このホテルは川のそばにあり、「屋久島ロイヤルホテル」という名前前でロケーションは最高です。この景色は絶対売り物になる、再生したいと思いました。古いホテルですから昔から皇室の方もよく利用されています。有名な人もいっぱい泊まっています。最近の有名な人では、NHKの元キャスター宮崎緑（現千葉商科大学政策情報学部長）さんがお泊まりになっています。屋久島一古く伝統のあるホテルを何とか残したい一心です。林美美子さんをご存知ですか。あの『放浪記』を書いた作者です。『浮雲』という本も書いています。『浮雲』の中で、「屋久島は月のうち35日雨が降る」という名言を執筆したホテルです。観光に来た人はロイヤルホテルということで凄いいホテルを期待します。しかし、現実は屋久島一古いホテルです。苦情ばかりです。詐欺だという人もいました。私がい取り、まず最初に取り組んだことは名前を変えようということ。どんな名前にしようか悩みました。そこでこの宿は縄文杉、宮之浦岳登山口に一番近く、登山に便利な宿をキャッチフレーズに、そしてターゲット

を登山客にしようと「屋久島山荘」に変えました。名前を変えただけで苦情は半減し、ネーミングの大切さを学びました。

この「屋久島ロイヤルホテル」のオーナーは隣の種子島にも「種子島ロイヤルホテル」というホテルを所有していました。銀行の話ですとこれも一緒に買ってくれど。観光客のあまり来ない種子島のホテルなどいらなと思うていましたが、この古いホテルを再生していくとが徐々に楽しくなり、観光客が少ない種子島ですが人口は屋久島の3倍近くあり、ビジネス客は単純に屋久島の3倍あるので、「ビジネスイン種子島」という名前に変えました。普通ホテルの稼働率は、ビジネスホテルであれば60%あればいいと言われています。ところが今の稼働率は80~90%ぐらいで頑張っています。この2つのホテルの改造は本当に大変でした。修理もさることながら一番の問題は、従業員の活気のなさです。もうこのホテルはどうしようもないという諦めの気持ちです。全員クビにしてこの暗い空気を払拭しなければいけないと思っていましたが、この従業員に変化が表れ始め、外装・内装が綺麗になってくるとみんなびっくりするほど活き活きしてきました。やはりみんな変わることを望んでいたん



素晴らしい眺望を誇るホテル屋久島山荘

です。女性も化粧をすると活き活きしてくるようにホテルも一緒です。それから私は従業員を集め、「私はホテルの経営のノウハウは持っていません。だから、ホテルの経営はどうしたらいいかわかりません。しかし、民宿のノウハウは持っています。このホテルは古いホテルです。名前ばかりのホテルです。私はこのホテルは大きな民宿だと捉えています。だから民宿的な経営方針で行きます」。従業員全員、お客様に声かけ運動を行いました。縄文杉から帰ってきたお客様には、「お疲れさま。どうでしたか。雨の中よく頑張りましたね」と、民宿八重岳時代に戻りました。そして今、私が希望するホテル民宿、屋久島山荘に近くなってきたような気がします。

ニミクな経営

5つの施設を作った時のポイントを考えると、民宿の時はとにかく一生懸命、少ない人数で多くのお客様をどうすれば快適に過ごしていただけるか、工夫と努力をすることを学びました。ロジの建設では、お客様とのコミュニケーションの中でお客様の希望を集約してきた宿ということで、自分の中に聞く耳を持っていたということ。宿作りで一番大切なことは、とにかくお客様の声

をたくさん聞くことです。苦情やお叱りの中に宿作りのノウハウが入っています。これは他の商売でも一緒です。今日はこの聞く耳ということだけ覚えて帰ってください。ビジネスイン八重岳は、完全にターゲットは仕事で来る人ですからほとんど手がかかりません。ただ、隣の音が聞こえないようにとか、快適性を追求しました。ビジネスホテルは建物と設備の重要性が大事です。

屋久島山荘では登山客にターゲットを絞り、登山客に特化しました。そのため、登山用品のレンタルショップを作りました。屋久島では縄文杉登山がメインです。しかし、登山用品は命がかかるため非常に高額です。靴1足でも買うとなると1万数千円します。レインウェアでもゴアテックスとなると2万円近くします。頭から足元まで揃えるとなると何万円もかかります。次にまた登山に行けばいいのですが、だいたい一度きりの方が多くで高くつきます。昔は土産品に力を入れていましたが、今はレンタルに力を入れています。屋久島山荘は登山客には嬉しい宿になりつつあります。それと、前の経営者が大手旅行会社との取引がほとんどであったのを、個人旅行主体に少しずつ切り替えました。なぜかというところ、大手の会社は全てに非常に厳しいです。団体のお客様を

たくさん送客はしてくれませんが、その中の1人のお客様が苦情を言うと必ず本社から文句を言ってきます。これは非常に危険な話です。裏を返すと1人のお客様の苦情が取引を停止する可能性を持っているということです。また、その会社の担当者が代わり、気に入らないと我々小規模ホテルは他社に変えられるということを勉強しました。だから大手に頼り切るということは怖いことです。7年前ホテルを買った時、大手依存率は70%ぐらいでした。今は大手依存率30%、個人旅行70%にシフト替えをしました。個人旅行主体に変えたことにより、大手の添乗員、社員に気を遣うことも少なくなりました。以前は大手の顔色をうかがっていたんですが、依存率を低くし、対等な付き合いができる体制作りをしました。そうすることで企業の力が強くなってきたことを実感いたします。はつきりものが言える会社になってきました。

また、それ以外の展開として、当社所有の屋形船がホテルの近くにあります。今までは夏の夜、夕涼みの時だけ運行していましたが、これでは採算など取れるわけがありません。これをホテルの売り物にしよう、屋久島の新しい観光スポットにしたいということで、朝食を屋形船でという新しい試みにチャレンジしています。私の知

る限り、これは日本全国どこにもないし、何とか定着できればと思っています。それとクリーニングも始めました。どうしてクリーニング場を作ったかという点、屋久島は非常にクリーニング代が高いです。東京の倍はするかもしれませんが。まず、シーツ、枕カバー、毛布カバー、掛け布団カバー、浴衣、フェイスタオル、バスタオル、1回の宿泊につき毎日これだけのクリーニングをやります。屋久島で4軒の宿を持っており、1カ月に150万円ほどのクリーニング代が必要です。屋久島は離島です。当然、乾燥させるためのガス代、油代は本土より高くなります。クリーニング屋さんになんか相談しましたが、どうにもならないということでした。そこでエコクリーニングをやらうと決めました。ガス使用の乾燥機とか灯油使用のポイラーは、都会の干し場のない限られたスペースの中で乾燥させるために考えられた機械だと思っています。屋久島のように土地の安いところは絶対に天日干しです。1カ月のガス代で1坪買えるところでガス乾燥機は必要ない。天日干しを基本に雨の日は乾燥機を最後の仕上げに使用します。それとアイロンかけをするのを止めさせました。今はノーアイロン、形状安定のワイシャツとかアイロンを必要としない素材があります。

この素材を使ったシーツであればアイロンをかける手間もいらない。速乾性にも優れている。天日干しのクリーニングは環境にもいいと思います。ホテルでクリーニングというのはたくさんありますが、天日干しというのはあまりないはず。この取り組みにより150万円のクリーニング代が3分の1になりました。そして今、この試みを屋久島の中から広めていこうと努力しています。

エピソード

よく、世界遺産になる前となった後での違いはありますかということを質問されますが、登録される前、屋久島は半農半漁ではなく、山に10日、畑に10日、海に10日という生活でした。世界遺産登録後は、産業構造が少し変わって観光業が2分の1を占めるようになり、残りの半分を漁業、農業、林業、商業が占めています。私が平成3年、民宿をスタートした時、宿泊業は50軒でした。今は200軒になっています。それほど観光業に関わる人が増えてきました。それから、私の小さい頃、50年前の親の教育は、ゴミは川や山に捨てるもの、捨てて当たり前という時代でした。私は平成7年からパークボランティア活動をしていますが、当初縄文杉の清掃に行くとその

道路にいっぱいゴミが落ちていました。更にその道路から脇道に入ったところには白い花がたくさん咲いていました。白い花とはティッシュのことです。現在もパークボランティアでゴミ拾いに行くのですが、今はゴミ一つ落ちていません。落ちたにしても次の人が拾うんでしょね。人々のゴミに対する意識も変わりました。それと何よりも鳥の人々が世界遺産に登録されたことにより島に誇りを持ち出したことです。ゴミも捨てなくなりました。親が誇りを持つと子どもも変わります。昔、私たちの親には屋久島に対する誇りがなかったと思います。それが顕著に表れるようになったのは子どもたちです。昔、私たちは鳥生まれのコンプレックスを持っていましたが、今の子どもたちは屋久島生まれであることに誇りを持ちはじめました。私たちの高校卒業時、島に残る生徒はほとんどいませんでした。残る人は何らかの事情を抱える人でした。今の子どもたちは違います。残りたいという気持ちに本当に強いものがある気がします。

私は屋久島を媒体にいろんなことを学びました。これから島に生きる人たちに自然を守ることに、観光だけでなくいろんな人たちとの出会いを演出してくれることを知ってほしいと思います。最初、宮崎先生からお

話を頂いた時は、45分話すなどとても無理ですとお答えしました。10分も無理だと思いました。ただ原稿を書いていくにつれ、これも言いたいこれも聞いてほしいというところで、これほどの長い時間になりました。もつとうまく話すことができれば良かったのですが、今の私には精一杯の45分です。しかし、この講演でパワーを頂きました。いろいろな話すことを考えていたら、これからの夢が見えてきました。千葉商大のOBが屋久島で暮らしている。そして、時代の流れに取り残されないように誰よりも頑張っている姿を皆さまに知ってほしい。商人のいる学校を卒業したプライドと誇りはずっと私を支えてくれました。これから新しい時代を生きる後輩の皆さまに勇気と希望を少しでも与えられたら光栄です。